

「サードプレイス」ということばを聞いたことはあるだろうか。聞きなれないことばではあるが、実は、我々の生活と深い関わりがある。このことばはもともとアメリカの社会学者であるレイ・オルデンバーグが自身の著書『ザ・グレート・グッド・プレイス』で提唱した概念で、自宅や職場に次ぐ第三の居場所という意味である。無料または安価で利用できること、飲食が可能であること、快適で居心地がよいことなどいくつか条件と呼べるものもあるが、具体的に場所の指定がされているわけではなく、カフェや図書館のように頻繁に通っている場所がそれにあてはまる。また、有名なカフェチェーン店であるスターバックスはこの概念をコンセプトとして設立された。

サードプレイスを持つことの具体的な効果には、日頃のストレスの解消をはじめ、自宅に居場所がなかったり職場に馴染めていなかったりする人に安らぎを与える点などが挙げられる。日本の現代社会においては、「週末うつ」の解消にもつながるだろう。現在、社会問題にもなっている週末うつは、休日にも仕事のことを気にしすぎるあまりプライベートの時間を十分楽しめない状態のことを意味する。このような生活を送っている人々がありのままでいられ、仕事のことを忘れられるようなサードプレイスを持つようになれば、この問題は解決に向かうはずだ。

このように、サードプレイスは幅広い意味を持つためすべての年代の人に良い影響を与えることができるが、現代の日本でとりわけサードプレイスが必要なのは高齢者である。退職した後の生活では、健康である人ほど通院などが無いために外出する機会が減る傾向がある。それに加えて現代では、以前よりも近所づきあいが稀薄になりつつあるせいで、世間との接点をほとんど持たない高齢者が増加している。極端な話だと、宅配便が来た時にしか人と話していない人もいるということだ。

この傾向は都市圏で特に顕著に見られ、孤独死という問題にもつながっている。亡くなっていることに誰も気づかないというこの悲しく、大きな問題の解決にはサードプレイスという考え方が不可欠なのではないだろうか。

そこで、私は解決への糸口として「子ども食堂」を提案したい。子ども食堂とは、子どもの貧困対策として行われている活動で、寄付された食材をボランティアが調理し、無料、もしくは数百円ほどで食事を提供している。同様の活動をする場を含めると、子ども食堂の数は全国で300ヶ所以上にも上る。子どもが夕食時に一人にならないようにするために利用するという家庭も多く、子どもたちにとってのサードプレイスであるといえる。しかし、何かしら問題を抱えている子ども食堂もあるという。設備や広報が不十分であること、人材が不足していることなどだ。このうち人材不足の要因としては、参加するボランティアの中に日中働いている社会人や学生が多く含まれていることが考えられる。これらの人々は、必ず毎日参加できるわけではないため、安定した人数を常に確保することが困難になっているのである。

そこで、このボランティアとしてより多くの高齢者に参加してもらうのはどうだろうか。社会人に比べるとやはり時間に余裕のある高齢者にもっと主体的に参加してもらうことができれば、ボランティア不足で閉鎖することがほとんどなくなるだろう。それだけでなく、高齢者の主体的参加を促すことは、高齢者側にもメリットがある。やりがいを感じ、自分が必要とされていることを実感できるだけでなく、外出する機会の少ない人にとっては、他のボランティアや子どもなど様々な年代の人々との関わりを持つことができ、安らげる場となる。「子ども食堂」は見方によっては「おとな食堂」にもなりうる。つまり、子ども食堂は、子どもにとってのサードプレイスであると同時に、おとな、特に高齢者にとってのサードプレイスにもなるということだ。

このようにして、高齢者がボランティアとして参加し、人と関わる機会が増えること、つまり、高齢者がサードプレイスを持つことは、前述の孤独死のような社会問題に対する解決策となるだろう。これは、「子ども食堂」に限った話ではないが、社会問題解決のために新たな施設を作ったり、新たな取り組みを始めたりするより、既存の施設、取り組みに目を向け、新たな面を与える、見つけ出す方がはるかに容易でコストもかからない。サードプレイスが人によってさまざまな形態、意味を持つように、物事を様々な観点から見て、捉えることが、現代の人々が抱える問題の解決への第一歩となるのだ。